「喜びの食事」

ヨハネ黙示録３章２０節

森島　牧人　牧師

今日は先回と同じ御言葉、ヨハネ黙示録３：２０の後半を読んで行きたいと思います。

先回ご紹介しました私の好きなイギリスの画家ウイリアム・ホルマン・ハントの「世の光」という絵を憶えておられるでしょうか。それは、片手にランタンを持った主イエスが、もう片方の手でとある家の扉をたたいておられるという有名な絵です。扉に把手がないことを問われたハントは、「見よ、わたしは戸口に立ってたたいている。…」（黙示３：２０）という、今日の聖書の箇所を描いたものだと答えたと言われています。御言葉の内容を描いた絵を見ながら、先回共に学んだことは、主イエスが私たちをお呼びになる声と、私たちの心の扉をたたかれる音を、決して聞き逃すことがないようにということでした。

今日は、「主イエスのノックに応じて私たちが心の扉を開けた時、どんなことが起こるのか」ということについて考えたいと思います。聖書は「だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に＜食事＞をし、彼もまた、わたしと共に＜食事＞をするであろう。」と続いています。私たちが扉を開けると、主が部屋の中に入って来られて、私たちと食事を共にされる、つまり私たちは神とそのような親しい交わりを持つことができるということです。そのために主は、低く低くなって私たちの心の扉の前に来ておられるというのです。

主と共にする食事とは、私たちにとってまさに＜喜びの食事・神の国の食事＞で、それを先取りしているのが本日の＜聖餐式＞です。この＜神の国の食事＞は誰にも開かれ、また誰もが招待されているのですが、ただ一つ、参加するに当たって重要なものがあるというのが、このハントの絵のテーマです。主イエスの救いを受けることを躊躇い、扉を閉ざして主を待たせてしまっている私たち、それはバプテスマを受ける前だけでなく、受けた後でもなお私たちは、しばしば自分の心を閉ざしてしまうのです。そう考えるとハントの絵の扉をたたくキリストの姿は、主イエス・キリストの全生涯を表しているのではと思わせられるのです。

二千年前のクリスマスの夜、人々から戸を閉ざされ家畜小屋でお生まれになった主イエスは、福音を宣べ伝えて方々を旅される日々の中で、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」（マタイ８：２０）と言われています。そんな主イエスが、地上の御生涯の最後を迎えられたのは神の都・エルサレムの外にあるゴルゴタでした。主イエスの十字架がはっきりと示しているのは、私たち人間が主を拒絶して、神の都の外へ追い出し、殺したということです。私たちの心の扉をたたくキリストの姿が、十字架に架けられたキリストの姿でもあることを、私たちは知っていなければなりません。

十字架刑で傷つかれた御手で、私たちの心の扉をたたかれる主イエス。にもかかわらず私たちは心の扉を開けようとしません。どうすれば扉を開けることが出来るのでしょう。聖書の中心的なテーマでもある、その答えは＜主イエスの愛に触れる＞ということです。拒む私たちを赦して扉をたたき続けてくださる主の熱き愛に触れて、私たちの凍てついた扉が融け出す、つまり私たちを救うために命をかけてくださった主の熱い愛の現実に触れる以外に、私たちの心の扉を開く術はないのです。＜永遠の命＞というプレゼントを持って地上に降り、「あなたたちは神の大切な子どもたちなのだ」と繰り返しながら私たちの心の扉をたたき続けてくださる主イエス・・「わたしの目にあなたは価高く、貴い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ４３：４０）との神の御声が聞こえて来るような気がします。

さて、聖書には、捕まるのを恐れ何重にも鍵をかけて潜んでいた弟子たちの所へ、復活の主イエスが姿を現わされる場面が出て来ます。その場面を思いますと、主は全能で何でもお出来になるのだから、私たちが心の扉を開けるまでお待ちになることはないのではないかとの考えが浮かびます。しかし、主はそうはされないのです。つまり信仰は命令でも支配でもないということ、主従関係・上下関係のもとに開かれた所に、喜びの交わりはないからです。本来私たちの助けや協力を一切必要とされない全能の神。その全能の神が唯一私たちに求められるもの、それは、私たちが神の愛に＜応答＞することです。ひたすら扉をたたいて開くのを待っておられる主イエスは、主の愛への私たちの応答を求め、私たちとの愛の交わりを望んでおられるのです。神の愛に応えて扉を開ける・・・それが信仰告白であり、バプテスマです。ハントの絵は、「だからわたしはいつまでも扉をたたき続けるのだ」という、主イエスの堅い意志を、私たちに示していると言えるかも知れません。

主イエスが扉をたたかれるということとは、主が私たちに問いかけておられるということです。主イエスに心を閉ざして生きて行くのか、それとも主イエスに心を開いて、主と共に生きるのか、今私たちは、そのことを主に問われているのです。

（説教要約　羽入田悦子）